
 <評 書>

「リウマチ」 改訂第2版

昭和大学教授 川上 保雄
 東京女子医科大学教授 森崎 直木 編集
 東京医科大学教授 大高 裕一

児 玉 俊 夫

ものの流れにはすべて潮時があるようだ。リウマチについては、その学問的にも、患者に対する総合対策についても、国際的にかなりの遅れをとっていたわが国でも、ここ数年間の充実が目を見はるものがある。今秋京都で行なわれる第13回国際リウマチ学会が動機となったことは事実であろうが、免疫学、整形外科的手術などの進歩は各分野の医師、研究者の関心をそそり、また福祉充実の世論におされて、リウマチの研究、治療、総合対策も活発に動き出している。

このような時に本書「リウマチ」の改訂増補第2版が出版された。書評を書くにあたり、この本を初めて読む方と、すでに第1版をお持ちの方とに分けて筆をとりたい。

まず本書を初めて読まれる方に対してであるが、本書は内科、整形外科、病理の三科の現役ではリウマチに対してもっとも重鎮と自他ともに許される川上、森崎、大高三教授により編集され、執筆者は計19名にの

ぼっている。リウマチ性疾患という点、その範囲が問題となるが、本書ではリウマチ熱、慢性関節リウマチに重点をおき、リウマチ以外の膠原病と、リウマチの周辺疾患を解説的に配列してある。さらにリウマチ学の背景としてリウマチとムコ多糖類、リウマチと膠原病概念およびリウマチと自己免疫の項が巻末にかなりのスペースをさかれている。本書の読者は、臨床医としては内科、整形外科と小児科の方が多いだろうが、いやしくもリウマチ患者を良心的に治療するためには、本書を熟読する必要がある。

つぎに本書の第1版をすでに読まれている方に対してだが、第2版の大きな特徴は岡山大学第三内科大藤教授によりリウマチ以外の膠原病として60頁におよぶ1章が新たに加えられたことで、SLE、強皮症、皮膚筋炎と結節性動脈周囲炎とがとりあげられている。

それと東大第四内科伊藤教授と池田氏によるリウマチ性心臓疾患のリ

ハビリテーションの項が新設されている。その他の各章、各項も少しずつ旧執筆者により改訂されている。

さて、リウマチ学についてのバイブルとして国際的に重きをなしてきた Hollander の Arthritis and allied Condition が昨年暮に第8版を出されたが、6年前出された第7版に対して全くの大改訂・増補で、この間にそれだけリウマチ学が進歩したのである。この米書と日本の本書と比較すると、失礼というか、残念というか、その内容にかなりの隔りを率直に認めざるをえない。しかし本書は日本のもっとも優れた執筆者をそろえ、日本のもっとも充実した「リウマチ」総説書であることも事実で、本書もさらに版を重ねて、日本のリウマチ学の先達となることを信じて疑わない。おそらく編集者も出版社もそのつもりでおられることだろう。（岡山大学整形外科教授）

B5頁/550/図83/写真195/原色図1

¥13,000/¥300/医学書院刊